バリー・ブロードフット著

「悲しみと屈辱の年月 第二次大戦中の日系カナダ人」

戦時中のカナダにおける日系（本）人差別問題について、その複雑さや内包する問題は、長い間、大半のカナダ人には比較的に知られていなかった。第二次世界大戦の直後、社会学者のフォレスト・ラビオレットは著書The Canadian Japanese and World War II（日系カナダ人と第二次世界大戦）の中で、この問題を初めて紹介した。一九七一年には、シズエ・タカシマ（高島静江）が、収容所における自らの体験の思い出を、自筆の水彩画を入れて本にした（A Child in Prison Camp、前川純子訳「抑留キャンプの子供」）。長い家族ぐるみのキャンプ旅行のような生活に対する嬉しさと、その生活に不満な父親に対する懸念を描いた本である。そして昨年は、ケン・アダチが、長くその刊行が待たれていたThe Enemy That Never Was（敵でなかった敵）を世に送った。この本は、日系（本）人の体験を日系市民の視点から分析したものである。

バリー・ブロードフットが今回Years of Sorrow, Years of Shame：The Story of the Japanese Canadians in World War II（悲しみと屈辱の年月――第二次世界大戦中の日系カナダ人）を書くに当って使った方法は、収容生活を送った人々の思い出をテープにとり、それをていねいに編集することであった。これはブロードフットが他の著書で試み、きわめて成功した方法である。全体は三七〇ページで、匿名のインタビューを一七〇の項目に分け、テーマごとに並べてある。多くの人々が同じことを繰り返し述べているが、この繰り返しと二四ページにのぼる写真とで、ほとんどの日系カナダ人に共通する体験をコラージュにまとめている。

本書を通じて、インタビューされた人々は、「どうしてわれわれが？」と問いかける。このような偏見が彼らに対してぶつけられたのは、なぜだろうか。アジア人を排斥する諸法令を作った人々の子孫は、この問いかけから身を避けてはならない。ブリティシュ・コロンビア大学の歴史家ピーター・ウォード博士は、人々の考え方と、ブリティッシュ・コロンビア州民の過半数が歓迎されざる移民から自分たちを守るために作った法制との関係を研究している。この研究は、カナダがどうして罪のない、そして勤労な日系カナダ人を虐待するに至ったかについて、私たちの理解を深めてくれるだろう。

ブロードフットは、最後に、こうしたことが再び起こるかと自問し、その可能性を否定している。「カナダはもはや一九四一年当時のカナダではない」というのがその理由である。日系人子孫の問題は、現在の傾向が続けば一世代で解決するだろう。今や日系の若者たちの大半は、日系以外の人と結婚しており、彼らの子供たちはほかのカナダ人とほとんど識別できなくなっているはずだ、という理由からである。

しかし、インタビューの一番最後で答えた人は、同じ質問に対し、「私も（再発の可能性を）否定したいが、そうは信じない。人間性というものはそんなに変わるものじゃない。ヒステリーも人種差別も経済的圧迫も今だに残っている。われわれは現在、かつてないほど個人的にも、また集団的にも利己的になっているのではないか」――と述べている。

もしこういうことが再び起こるとすれば、被害者はおそらく日本人の名前をもった人たちではないだろう。目立つグループであれば、他の誰でも対象になりうる。無思慮の偏見がどういう結果を生むかということを理解したいすべての人に、ぜひ読んでもらいたい本である。Doubleday社発行（評者はブリティッシュ・コロンビア大学のジョン・ハウズ助教授。バンクーバー・サン紙より転載）

ピエール・バートン著

「カナダの五つ子」

（The Dionne Years：A Thirties Melodrama）

一九三四年五月二十八日、オンタリオ州北部カランダーの近くの農家で五つ子が生まれた。すべて女の子で、エミリー、マリー、セシル、アネット、イボンと名付けられた。五人の誕生は町医者のダフォーに世界的名誉を、そして両親（父オリーバ・ディオン、母エルジア・ディオン）に苦悶をもたらし、子供たちの一挙手一投足に世界中の目がそそがれることになった。あまりマスコミが騒ぎ過ぎたため、子供たちはオンタリオ州政府によって法的に両親から引き離され、ダフォー養育病院に収容されることになった。州はやがて五つ子を利用した商品や五つ子に関する映画（「田舎医者」というハリウッド映画になった）などの契約料から上がる収入を貯える基金を設立した――。

この本は、ディオン姉妹の誕生から今日までの生活を描いたものである。

著者によると、父親のオリーバは、単純ではあるが、映画の中のような顔にしまりのないうすのろではなく、世界的大恐慌のまっただ中にあって、どうにかやりくり算段していたという。また五つ子をとり上げた医者のダフォーも、当時あまたの新聞雑誌に書かれたような神様のように親切でやさしい人ではなく、複雑、粗野で、相手に恩をきせ、ふってわいた名声と富を味わいながら、社会的に素朴な田舎医者のイメージにしがみつくような人であったらしい。

マスコミも、興業師も、政治家も、また一般大衆も、両親から五つ子を切り離した医者を支持し、五つ子は世間の好奇心の人質となった。父親は子供たちをわが家に取り戻そうと必死だった。第二次世界大戦が起きて五つ子に対する関心がうすれ、父親はようやく養育権を奪回したが、長い間家族から離れ、保母たちから手厚く扱われてきた子供たちは、もはや家庭という環境に適応できなかった。

あれから三〇余年。関係者の大半はいまやない。五つ子のうち、エミリーとマリーも死んだ。イボン、アネット、セシルは健在だが、親族とは今だ疎遠だ。集まった多額の基金も、法的に五つ子を家族から隔離した費用などに当てられ、ほとんど底をついた。

これは善意のつもりでしたことが不幸に終わったという悲しい物語である。メロドラマを越えて、ただ〝他人と違う〟というだけでいかに人間が搾取されたかを訴える。McClelland and Stewart社発行。

――（書評ハリー・J・ボイル。マクリーン・マガジンより転載）

大使館図書室案内

○森研三、高見弘人共著「カナダの萬蔵物語（付・パイオニアの人達の素顔）」（尾鈴山書房　東京都新宿区中里町一八）